

2022 年度 卒業証書・学位記授与式 式辞

一段とあたたかな日差しが降り注ぐこの佳き日に、大谷範子名誉学長様、芝原玄記理事長・学園長様のご臨席を賜り、2022 年度卒業証書・学位記授与式を挙行できますことは、私たちすべての教職員にとって大きな喜びでございます。

京都女子大学大学院博士前期課程、修士課程を修了された皆さん、そして文学部・発達教育学部・家政学部・現代社会学部・法学部を卒業された皆さん、おめでとうございます。これまで皆さんが積み上げてこられたご努力とご研鑽に対して、心よりの敬意を表します。とりわけ皆さまの学年は大学生活の大半を新型コロナウイルス感染症拡大に翻弄され、思い通りの大学生活を過ごすことはできなかったと思います。しかし数々の困難を克服してこの日を迎えられた経験は、必ずこれからの人生にとって意義深いことと信じています。

また、ご家族の皆さまにも、画面越しではございますが、お嬢様が卒業・修了をお迎えになりましたことに心よりお祝いを申し上げます。お嬢様の晴れの姿を、この場で共にお祝いいただけないことは、誠に心苦しく申し訳なく存じます。お嬢様の成長を見守ってこられた、これまでの長年のご労苦に対して心よりの敬意を表させていただきます。また、育友会などを通して大学に賜りました様々なご支援についても、大学を代表いたしまして厚くお礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

さて、今、皆さんの胸には、明日からの新しい生活への期待と、そして少しばかりの不安が去来しているのではないのでしょうか。今、まさに飛び立とうとされている皆さんに、ここで改めて、本学の設立に尽力した甲斐和里子、大谷籌子、九條武子の3人の女性についてお話したいと思います。



ご存じのように、本学の前身である京都女子高等専門学校は、甲斐和里子、大谷壽子、九條武子の3人の女性の尽力によって、103年前、1920年に設立されました。時あたかも、2年前から世界を恐怖に陥れたスペイン風邪の流行、人類が初めて経験したパンデミックの最終年でありました。

「男女平等社会実現」を希求する熱い思い



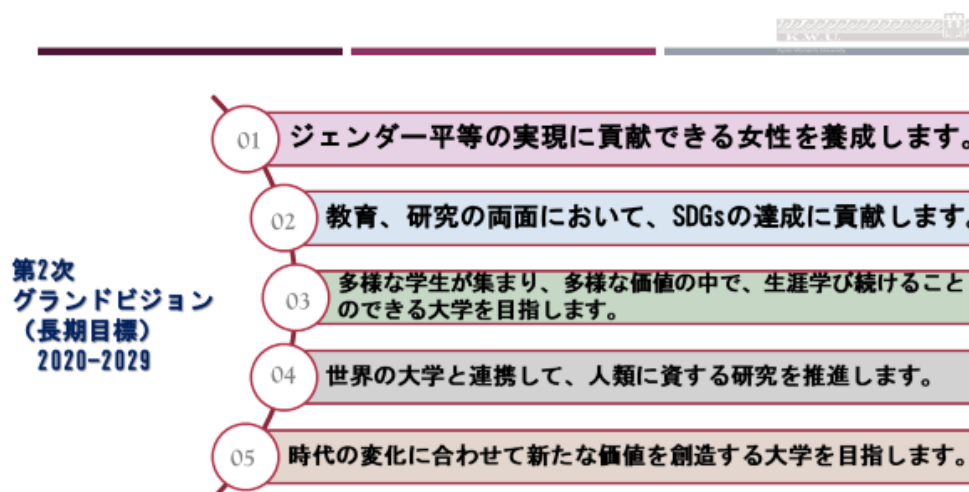
- 大谷壽子「男尊女卑は仏教の思想のやうに誤られてゐるが釈尊は決して男女に尊卑の差を置いてゐられない。仏陀は・・・**男女平等機会均等**に扱はれたことは否定し得ない事実である。男性は婦人を或いは人形視し或いは奴隷視してすべての自由を束縛して来たがこれは時代を解しない人達の誤った考へからである。然しかやうな誤った婦人観の生れるのも一面**婦人自身に欠点のあることは引込主義で男性の横暴を甘受してゐることにも起因する**」
(1925年『婦人』)
- 「男女平等社会」実現のためには**女性の高等教育機関**が必要
- 女性が発起し、あまたの女性たちの募金を基盤として設立された女子大学

女性のための高等教育機関の設立に情熱を燃やした大谷壽子氏は、このスライドにあるように、常日頃「仏陀は・・・(私たちを)男女平等機会均等に扱はれたことは否定し得ない事実である。男性は婦人を或いは人形視し或いは奴隷視してすべての自由を束縛して来たがこれは時代を解しない人達の誤った考へからである。然しかやうな誤った婦人観の生れるのも一面婦人自身に欠点のあることは引込主義で男性の横暴を甘受してゐることにも起因する」と折に触れて語っておられたと記録されています。

大谷壽子氏は、仏教の平等思想に根差した「男女平等機会均等」の実現を阻む原因の一つに女性自身に問題があるとの考えから、「男女平等機会均等」な社会の実現には女性の高等教育が重要、と考え「女子大学設立」を発願されました。

明治民法が施行された直後の明治末、日本では女性は参政権はもとより法的に無能力の状態に置かれていた時代にあつて、まだ20歳代半ばの若さで、「男女平等」を語り、そして日本各地を行脚して全国に仏教婦人会を組織するなど、その考え方の先進性と行動力には感銘を禁じえません。

大谷籌子氏が組織した仏教婦人会 30 万人の会員たちも大学設立に向けて募金活動を展開しました。残念ながら文部省によって女子大学設立は認可されませんでした。大学に代わって設置された、本学の前身である京都女子高等専門学校は、仏教系としては初めての、そして女性が発起し女性たちが資金活動の一翼を担って設立された、数少ない女性のための高等教育機関です。



2020 年、本学はこの京都女子高等専門学校設立から 100 年を期して、第 2 期グランドビジョンを制定しました。その第 1 項目に、「ジェンダー平等の実現に貢献する女性人材の養成」を掲げています。その背景には、大谷籌子氏たちが大学設立を発願してから 100 年以上経っても、なお男女平等にほど遠い日本の現実があります。

日本のジェンダー格差の現状

ジェンダーギャップ指数

116位

東アジア・太平洋州

最下位

■ ジェンダーギャップ指数

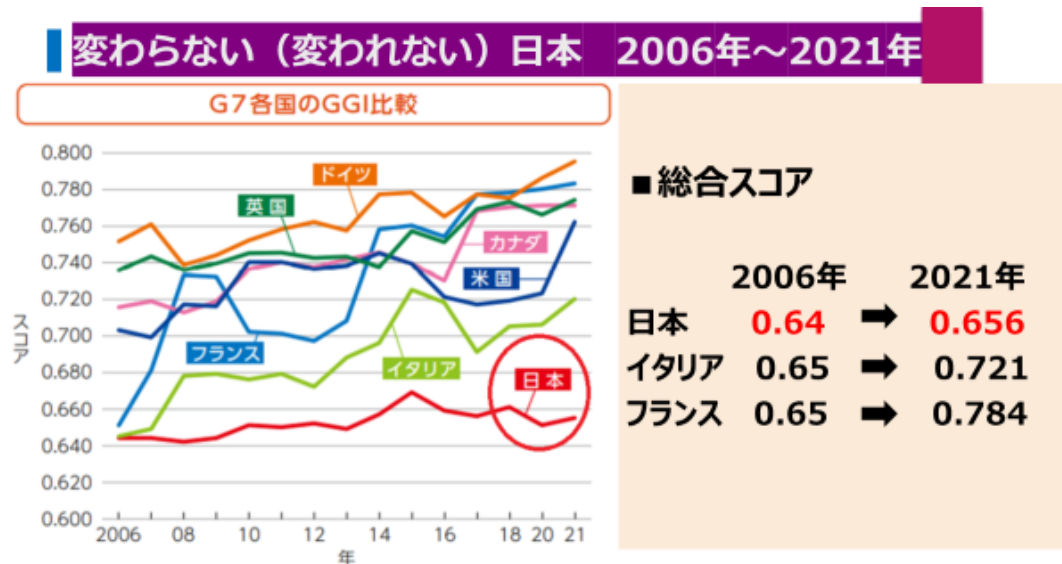
Gender Gap Index (GGI)

経済分野、教育分野、政治分野、保健分野における男女格差

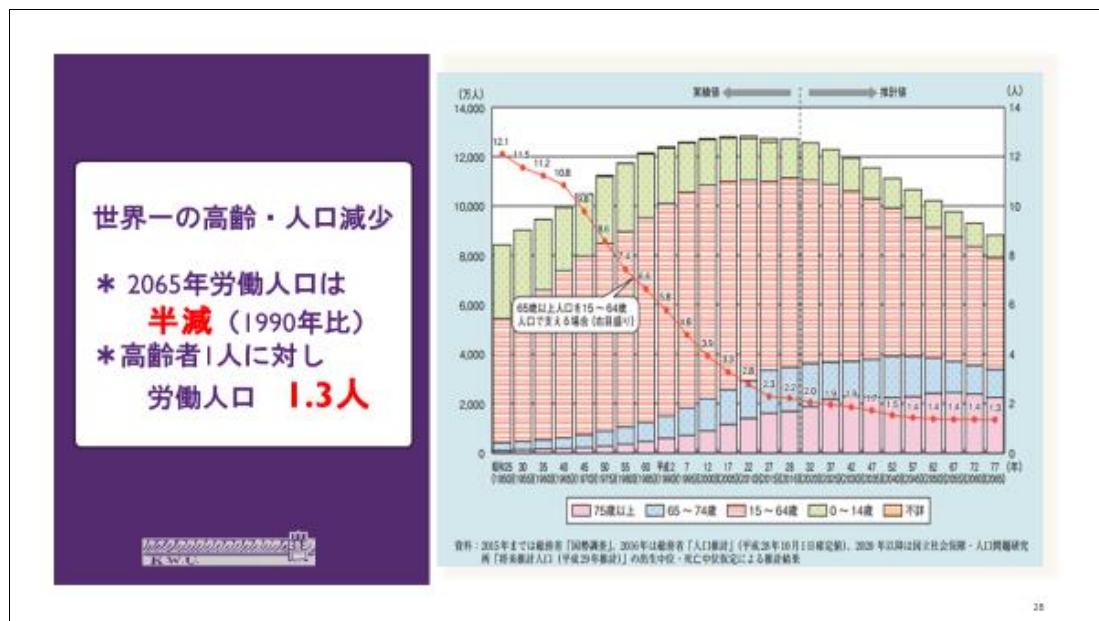
実施：世界経済フォーラム

	2022年	2021年
■ 健康領域	63位	65位
■ 教育領域	1位	92位
■ 経済領域	121位	117位
■ 政治領域	139位	147位

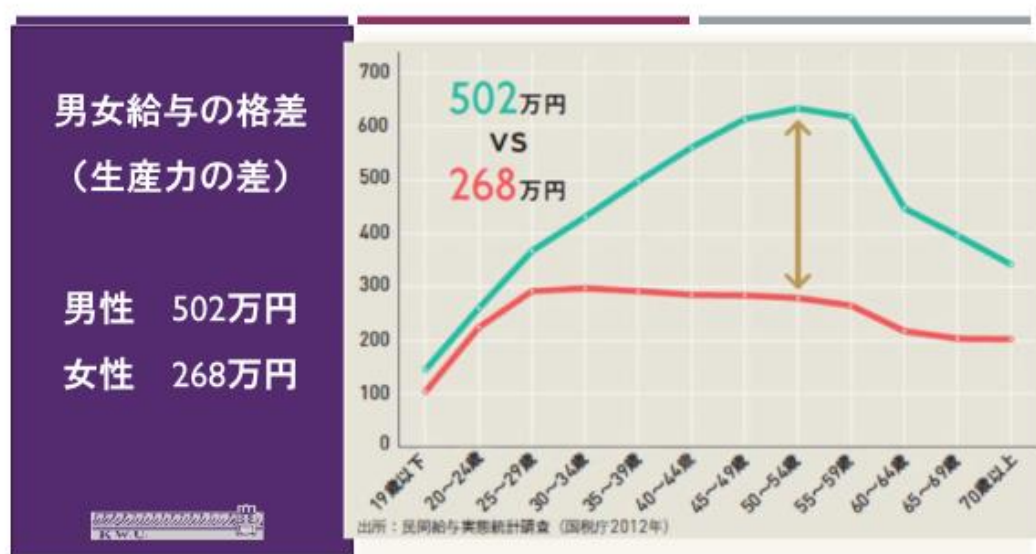
ご承知のように、男女の格差の開きを示すジェンダー・ギャップ指数が、日本は世界143ヶ国中116位です。これは先進諸国はもとよりアジア・太平洋州の中でも最下位です。経済領域では先進諸国で唯一、日本だけが順位を下げました。その背景に失業率が男性の2倍、給与格差が先進諸国で一番開いているという現実があります。政治領域では女性議員や女性閣僚が極端に少ないことが理由です。



そして大きな問題はこの16年間、日本が変わっていないことです。このような現実を変革する、その担い手となる女性を育てることは女子大学の責務だと考えています。



「人生 100 年時代」を歩んで行かれる皆さんの前途には、無限の可能性と洋々たる世界が広がっています。しかしその一方で日本の未来は決して明るいものではありません。世界一の高齢社会、そして戦争などがないにもかかわらず人口が減少している唯一の国です。2065 年、皆さんが 65 歳になられたときには、労働人口は 1990 年の半分、65 歳以上人口を 1 人の労働人口で支える社会になります。



この日本の危機を解決するベストの解決法は、皆さん方自身の手握られています。男性と女性のこの生産力の格差を埋めることで「人口減少」という避けることのできない日本の危機を救うことが出来るのです。

このように申し上げると、「いや、私なんて・・・」と思われる方もおられるのではないのでしょうか。しかし「私なんて」という言葉は、今日を限りにこの場で捨て去ろうではありませんか。

国際女性デー連携キャンペーン

女性の力を、社会を動かす力に。

「私なんか」は、やめましょう。
なりたい自分になるのに、遠慮はいらない。
何かを変えたい、と思ったら
「私なんか」ではなく「私こそ」、
その一歩が、
皆にとっての勇気となる。

2023年3月8日朝日新聞

京都女子大学は、1週間前の3月8日国際女性デーに、このようなキャンペーンを展開しました。「私こそ、から始めよう」、この言葉を、私は本日、皆さん方に卒業の花向けとしてお贈りいたします。女性の力で社会を動かそうではありませんか。

京都女子大学が学生みなさんに提供した教育内容と女子大学という教育環境は、皆さんが社会で堂々と胸を張って歩むことを保証するに値する内容であったと自負しています。ましてこの3年間は、世界的パンデミックの中で、皆さんは大学教育の実質を追求するため懸命に努力してこられました。それを支えるべく先生方も職員も大学を挙げてあらゆる前例を廃してこの困難な状況にチャレンジしてきました。本日、授与する卒業証書を心の糧にして、夢は大きく、志を高く掲げ、京都女子大学の卒業生としての誇りをもって歩み出してください。

女子大学の教育上の利点は、社会構造の中に根深く組み込まれているジェンダー規範から自由な環境で伸び伸びと自分を発揮し、行動する環境を提供できる点にあります。就職活動を通して実感された方もおられるかもしれませんが、京都女子大学の卒業生は企業で高く評価していただいています。その理由の一つが、主体的に行動できる女性である、という点です。女子大学という環境で学んだ成果が評価されているのだと思います。

明日から皆さんが歩まれる道は多様です。しかしどの方向に進まれても、100年以上も前に大谷箒子氏ら3人の女性たちが、「男女平等機会均等」社会の実現を目指して設立し

た大学で学んだことの誇りを忘れず、その思いの実現に向けて、それぞれの立場で、ご自身に出来ることから、社会を変える努力を続けていただきたいと思います。

男女平等な社会は、子どもや高齢者、障がい者など、全ての人権が尊重される社会でもあります。

すべての修了生・卒業生の皆さまのご活躍とご多幸を念じて私の式辞いたします。

2023 年 3 月 15 日

京都女子大学学長 竹安栄子